―風化する記憶―

慰霊の日は、1974年10月に県条例により沖縄独自の祭日として制定され、時代の流れとともに風化していく戦争の悲惨さ、怖さ、そして命の尊さを次の世代へ引き継ぐための大切な日として位置づけられている。
あの悲惨な地上戦を体験した人々から発せられる言葉は、一つひとつが重く、悲しくも実際に体験した「記憶」から生まれている。

風化させてはいけない、語り継がなければならない「真実」を、私たち世代は「記録」し、歴史の事実として次の世代に繋げていかなければならない。

住民を巻き込む地上戦を経験した沖縄。戦後においても、悲惨な事故が相次いで発生し尊い命が失われた。

1959年6月30日、石川で起った米軍ジェット戦闘機の墜落事故。制御不能の戦闘機が石川市（当時）の市街地へ墜落し、機体の一部が宮森小学校を直撃。死者17名（児童11名、一般６名）、負傷者210名（児童156名、一般54名）、世間を震撼させる事故が発生。
また、２年後の1961年12月7日、具志川村川崎（当時）の民家にも同型のジェット戦闘機が墜落し、死者２名、負傷者６名がでるなど、大惨事となった。